

陸游の律詩における対句の特色

朱 東 潤 著
三 野 豊 浩 訳

〔解題〕

○本稿は、朱東潤（一八九六～一九八八）の『陸游研究』（一九六一年九月、中華書局）所収の論文「陸游律句的特色」の翻訳である。

○原文には注はないが、本文中に引用された陸游の詩の製作時期を、末尾に補注として記した。製作時期は、すべて錢仲聯『劍南詩稿校注』（一九八五年九月、上海古籍出版社）の題解による。

○訓読は旧仮名遣いを原則としたが、ルビに関しては新仮名遣いとした。

陸游（一一二五～一一二〇）の詩の主要な形式は、彼の律詩、なかんずく七言律詩であると考えるべきである。律詩の様式は比

較的固定したもので、古詩のように、任意に変化したり、自在に運用したりすることはできない。排律以外は、通常四字あるいは五十六字のみなので、語句の運用にも必然的な制限があり、一層厳格で凝縮されていることが要求され、この八句の中で、言うべきことを完全に言い切らねばならない。内容形式の制限を受けるが、このわずか八句の中でも、内容は十二分に充実しているのだということを、読者に必ず理解させなければならぬ。過去の律詩の作者は、いずれもこの点に努力を傾注したが、陸游はそれに成功した詩人の一人である。陸游の作品の中で、「書憤」（『詩稿』巻十七）¹は代表作の一つである。

早歳那知世事艱 早歳那ぞ知らん世事の艱きを

中原北望氣如山 中原北望すれば氣山のごとし

樓船夜雪瓜洲渡 樓船 夜雪 瓜洲の渡

鐵馬秋風大散關 鐵馬 秋風 大散關

塞上長城空自許 塞上の長城と空しく自ら許せしも

鏡中衰鬢已先斑 鏡中の衰鬢 已に先づ斑なり

出師一表眞名世 出師の一表 眞に世に名あり

千載誰堪伯仲間 千載 誰か伯仲の間に堪へたる

この詩の中で、彼は四十歳で鎮江（今の江蘇省鎮江市）にいた時と、四十八歳で南鄭（今の陝西省漢中市）にいた時の思惟と感情を完全に表現している。陸游は、次のように述べている。——詩を書いているこの年（六十二歳）、自分は壮大な抱負を抱いているが、すでに老衰してしまった。しかし千年以前の諸葛孔明を想起すると、誰が彼と肩を並べることができるだろうか、という問題を提起したい思いを禁じ得ない——と。

この八句の中に、過去があり、現在があり、東南の瓜洲渡があり、西北の大散關があり、往年の抱負があり、今日の感慨がある。最後の結びでは、自分をそれなりに見積っており、同時に無限の期待をも提示している。陸游の詩の中で、これは極めて良い作品であり、これに類するものは、全集の中に他にも少ない。冒頭二句は、氣勢が人の耳目をそばだてるかのようであり、末尾の二句も少しも弛緩した形跡がなく、いずれも重視に値する。

一般の作品では、主要な力点は中間の四句に置かれ、この四句は、通常は「景」が一聯、「情」が一聯で、時には更に「景」の中に「情」があり、「情」の中に「景」があり、「情景交融」の詩句となる。律詩は凝縮が要求され、最も経済的な手法によって、比較的複雑な意境を伝達することが要求され、時には典故を使用して、読者のために提示しなければならぬ。陸游は僻典（かたよった難解な典故）を用いることが少なく、それゆえ創作の上で、多大な流弊がない。ある種の作者、たとえば北宋の西崑体の詩人などは、生硬で難解な典故を過度に使用し、ひどい場合には、一つの詩の全八句がすべてこのようである。ひとたびこうなると、読者が容易に理解できなくなるのみならず、同時に作者の意図を伝達することもできなくなり、誤った道を歩くことになってしまう。

陸游の詩中における典故使用の例句は、次の通りである。

蹈海言猶在 海を踏むの言猶ほ在り

移山志未衰 山を移すの志未だ衰へず

『詩稿』卷六十六「雜感」⁽³⁾

度兵大峴非無策 兵大峴を度るは策無きに非ず

收泣新亭要有入 泣を新亭に収むるは人有るを要す

『詩稿』卷十八「夜千峰樹に登る」⁽⁴⁾

青衫曾奏三千牘 青衫 曾て奏す 三千の牘

白首猶思丈二笏 白首 猶ほ思ふ 丈二の笏

『詩稿』卷十八「雪夜 感有り」⁽⁵⁾

事去大牀空獨臥 事 去りて 大牀に空しく独り臥す

時來豎子或成名 時 来らば 豎子 或は名を成さん

『詩稿』卷二十四「冬夜 書を読み、忽ち鶏唱を聞く」⁽⁶⁾

壯日自期如孟博 壯日 自ら孟博のごとくならんと期す

殘年但欲慕初平 殘年 但だ初平を慕はんと欲す

『詩稿』卷六十三「枕上の作」⁽⁷⁾

虛名定作陳驚坐 虛名 定めて陳驚坐と作らん

好句眞慚趙倚樓 好句 眞に趙倚樓に慚づ

『詩稿』卷七十五「恩もて渭南伯に封ぜらる。唐の詩人趙

蝦 渭南の尉と為り、当時之を趙渭南と謂ふ。後來 將に

予を以て陸渭南と為さんとするか。戯れに長句を作る」⁽⁸⁾

これらの対句の中で陸游は、経済的な手法によつて比較的複雑な意境を伝達するという任務を果たしている。「事去」の一聯は、自分の政治上の失敗と、たとえ失敗に遭遇しても、なおも屈服に甘んじないという気概を表現していて、眞に「言簡にして意賅る(言簡意賅)」と言うべきであり、律詩の創作の中で、

非常に成功したものである。

その次は、「写景」である。陸游は若い頃に前線地帯に行き、名山や大河を跋涉したので、写景の詩句においては、非常に壮大である。晩年以降は農村で生活したので、景物を描写すると、通常は細緻で巧妙である。これが、概略である。壮大な対句には、たとえば次のようなものがある。

浪蹴半空白 浪 半空を蹴りて白く

天浮無盡青 天 無尽に浮かびて青し

『詩稿』卷一「海中酔題 時に雷雨初めて霽れ、天水相接するなり」⁽⁹⁾

亂山徐吐日 亂山 徐に日を吐き

積水遠生煙 積水 遠く煙を生ず

『詩稿』卷三「隣水延福寺早行」⁽¹⁰⁾

日依平野沒 日 平野に依りて没し

水帶斷槎流 水 斷槎を帯びて流る

『詩稿』卷八「江樓」⁽¹¹⁾

山平水遠蒼茫外 山 平らかに水遠し蒼茫の外

地闊天開指顧中 地 闊き天開く指顧の中

『詩稿』卷十「初めて夷陵を発す」⁽¹²⁾

無窮江水與天接 無窮の江水 天と接し

不斷海風吹月來 不斷の海風 月を吹き来る⁽¹³⁾

『詩稿』卷十一「公安県に泊す」⁽¹³⁾

別都王氣半空紫 別都の王氣 半空 紫に

大將牙旗三丈黃 大將の牙旗 三丈 黃なり

『詩稿』卷十一「將に金陵に至らんとして、先に劉留守に寄せ献す」⁽¹⁴⁾

この一類と関連するものに豪壮な詩句があり、景物を描写する中に、詩人の主観的な感情の要素を含んでいる。たとえば、次のようなものである。

度沙風破肉 沙を度れば 風肉を破り

攻壘雪平壕 壘を攻むれば 雪壕に平らかなり

『詩稿』卷二十八「小出塞曲」⁽¹⁵⁾

水瘦河聲壯 水瘦せて 河声 壯に

萁枯馬力生 萁 枯れて 馬力 生ず

『詩稿』卷三十三「初冬感懷」⁽¹⁶⁾

唾手每思雙羽箭 手に唾して毎に思ふ 双羽箭

快心初見萬樓船 心を快くして初めて見る 万樓船

『詩稿』卷十一「采石を過ぎて感有り」⁽¹⁷⁾

悲歌未肯彈長鈇 悲歌 未だ長鈇を弾ずるを肯ぜず

豪氣猶能臥大牀 豪氣 猶ほ能く大牀に臥す

『詩稿』卷十一「信州東駅晨起」⁽¹⁸⁾

山川信美故郷遠 山川 信に美なるも 故郷 遠く

天地無情雙鬢秋 天地 情 無くして 双鬢 秋なり

『詩稿』卷十二「春晚」⁽¹⁹⁾

しかしより一層多いのは、描写が細微な対句である。ここでは、細緻な観察と虚心な体得が必要とされるが、最も肝心なのは、細密な描写である。このような詩句は、陸游の晩年に特に多く、およそ数聯をあげることので例証とする。

野煙山半失 野煙りて 山半ば失はれ

溪漲浦横通 溪漲りて 浦横さまに通ず

『詩稿』卷四十七「舍北」⁽²⁰⁾

山深雲滿屋 山深くして 雲屋に満ち

夜靜月當門 夜靜かにして 月門に当たる

『詩稿』卷七十八「秋日前輩の新年の韻に次す」⁽²¹⁾

江邊雲溼初橫雁 江辺雲湿りて初めて雁を横さまに

し

牆下桐疎不庇蟬 牆下桐疎らにして蟬を庇はず

『詩稿』卷二「久しく病み、灼艾の後独臥して感有り」⁽²²⁾

天際斂雲山盡出 天際雲を斂めて山尽く出で

江流収漲水初平 江流漲を収めて水初めて平らかなり

『詩稿』卷四「客を送りて江上に至る」⁽²³⁾

弄姿野鷺晴猶斂 姿を弄ぶ野鷺晴れて猶ほ斂まり

作態江雲晚未歸 態を作す江雲晚に未だ帰らず

『詩稿』卷八「昼臥」⁽²⁴⁾

護雛燕子常更出 雛を護る燕子常に更に出で

著雨楊花又嬾飛 雨を著くる楊花又た飛ぶに嬾し

『詩稿』卷二十二「晚春感事」⁽²⁵⁾

孤燈無焰穴鼠出 孤灯焰無く穴鼠出で

枯葉有聲鄰犬行 枯葉声有りて隣犬行く

『詩稿』卷六十三「枕上の作」⁽²⁶⁾

雲迷野渡一聲雁 雲は迷はしむ野渡 一声の雁

雪暗山村千樹梅 雪は暗くす山村 千樹の梅

『詩稿』卷六十四「冬夜」⁽²⁶⁾

城角吹殘河漸隱 城角吹き残はれて河漸く隠れ

海氛消盡日初生 海氛消え尽くして日初めて生ず

『詩稿』卷七十二「曉思」⁽²⁷⁾

この一類は、いずれも非常に細緻なものである。「江邊」の一聯は、江上の大量の水蒸気のために雲が湿気を帯びるのであり、雲中の湿気が重過ぎるために雁の群れが不ぞろいなのである。もう一方の句について言えば、垣根に寄り縫っていて養分が足りないために桐の葉が少なく、桐の葉がまばらなために蟬の全身が露出しているのである。二句十四字で、詩人が目にした情景を完全に描写し尽くしている。『詩稿』卷三十「陽関の図に題す」の領聯、⁽²⁸⁾

荒城孤驛夢千里 荒城 孤驛 夢 千里

遠水斜陽天四垂 遠水 斜陽 天 四垂

は、山奥の僻地を非常に細緻に詠い、それでいて一種の凄愴感が充満してもいる。

「写景」の詩句は、詩人が目にした事物を詠うもので、客観的な描写以外に、主観的な要素をも含んでいる。「写情」の詩句は、詩人が自分の感情を詠うもので、ここでは主として主観的な要素である。彼は、自分の充溢した感情によって、人を感動させる。それゆえ律詩の創作において、これはより一層重要な要素である。

陸游の「写情」の詩句のあるものは、雄大と沈勇の感情を表現している。たとえば、次のようなものである。

孤舟鏡湖客 孤舟 鏡湖の客

萬里玉關心 万里 玉関の心

『詩稿』卷二十七「春陰」⁽²⁹⁾

江聲不盡英雄恨 江声 尽くさず 英雄の恨み

天意無私草木秋 天意 私無く 草木 秋なり

『詩稿』卷二「黄州」⁽³⁰⁾

五更風雨夢千里 五更の風雨 夢 千里

半世江湖身百憂 半世の江湖 身 百憂

『詩稿』卷十二「北窓」⁽³¹⁾

老子猶堪絶大漠 老子 猶ほ大漠を絶するに堪ふ

諸君何至泣新亭 諸君 何ぞ新亭に泣くに至らん

『詩稿』卷十四「夜水村に泊す」⁽³²⁾

浮生亦念古有死 浮生 亦た念ふ 古より死有るを

壯氣要使胡無人 壯氣 胡をして人無からしめんと要す

『詩稿』卷十五「讀書 罷み、小酌して偶々賦す」⁽³³⁾

この種の感情と関連するものに、自負の詩句がある。たとえば、次のようなものである。

大節艱危見 大節 艱危に見れ

眞心夢寐知 眞心 夢寐に知る

『詩稿』卷五十「老学庵」⁽³⁴⁾

殺身有地初非惜 身を殺すに地有るは初めより惜しむ

に非ざるも

報國無時未免愁 国に報ゆるに時無きは未だ愁を免れ

ず

『詩稿』卷三「慧照寺の小閣に登る」⁽³⁵⁾

據鞍馬援雖堪笑 鞍に據るの馬援 笑ふに堪へたりと雖

も

強飯廉頗亦未非 飯を強ひるの廉頗 亦た未だ非ならず

『詩稿』卷六十七「親旧過ぎられ、多く強健を賀せらる。」

戯れに此の篇を作る⁽³⁶⁾

老羆尚欲身當道 老羆尚ほ身道に当たらんと欲す

乳虎何疑氣食牛 乳虎何ぞ氣牛を食ふを疑はん

『詩稿』卷七十二「秋晚」⁽³⁷⁾

詩人には自負の情熱があるが、あるべき出口にたどり着いておらず、このことが感慨をもたらすのである。陸游は、自分は諸葛孔明・王猛⁽³⁸⁾・馬周⁽³⁹⁾・李勣⁽⁴⁰⁾などに類する人物であると平素から自負していた。彼には功名を樹立したいという願望があり、そのことを終始隠したことはなかったが、終始満足を得ることはなかった。陸游自身、次のように語っている。

飄零爲祿仕 飄零 祿仕を為し

蹭蹬得詩名 蹭蹬 詩名を得たり

『詩稿』卷五十八「秋夕」⁽⁴¹⁾

それゆえ彼の詩の中に、感慨の詩句は比較的多い。たとえば、次のようなものである。

報國計安出 報国の計 安くにか出ん⁽⁴²⁾

滅胡心未休 滅胡の心 未だ休まず

『詩稿』卷九「枕上」⁽⁴²⁾

漢廷雖好老 漢廷 老を好むと雖も⁽⁴³⁾

楚澤未招魂 楚沢 未だ魂を招かず

『詩稿』卷五十二「門を掩ふ」⁽⁴³⁾

捫蝨雄豪空自許 虱を捫る雄豪 空しく自ら許せしも

屠龍工巧竟何成 竜を屠る工巧 竟に何をか成さん⁽⁴⁴⁾

『詩稿』卷三「即事」⁽⁴⁴⁾

時平壯士無功老 時 平らかに 壯士 功無くして老い

鄉遠征人有夢歸 郷 遠くして 征人 夢有りて帰る

『詩稿』卷七「春残」⁽⁴⁵⁾

大牀獨臥豪猶在 大牀に独臥して 豪 猶ほ在り⁽⁴⁶⁾

萬衆横行策竟疎 万衆 横行するも 策 竟に疎なり

『詩稿』卷八「庵の壁に題す」⁽⁴⁶⁾

關河可使成南北 関河 南北と成らしむべけんや

豪傑誰堪共死生 豪傑 誰か死生を共にするに堪へん⁽⁴⁷⁾

『詩稿』卷八「獵罷みて夜飲し、独孤生に示す」⁽⁴⁷⁾

三萬里天供醉眼 三万里の天 醉眼に供し

二千年事入悲歌 二千年の事 悲歌に入る

『詩稿』卷二十三「鏡を覽る」⁽⁴⁸⁾

規模肯墮管蕭亞 規模墮つるを肯ず 管蕭の亜

夢想每馳河渭間 夢想毎に馳す 河渭の間

『詩稿』卷二十六「感懷」⁽⁴⁹⁾

詩の中に感慨の要素が多すぎると、時には老齡や不遇を嘆き悲しむという道を歩み、詩における常套手段となり、かえって読者の嫌悪を引き起こす。このような詩は、陸游の詩稿の中にはないわけではない。たとえば、『詩稿』卷一の「霜風」⁽⁵⁰⁾である。

十月霜風吼屋邊 十月霜風屋辺に吼え

布裘未辦一鉢綿 布裘未だ一鉢の綿を辦ぜず

豈惟飢索隣僧米 豈に惟だ飢多て隣僧の米を索むるのみ

ならんや

眞是寒無坐客氈 眞に是れ寒きに客をして坐せしむるの氈無し

氈無し

身老嘯歌悲永夜 身は老い嘯歌して永夜を悲しみ

家貧撐拄過凶年 家は貧しく撐拄して凶年を過ごす

丈夫經此寧非福 丈夫此を経るは寧ろ福に非ずや

破涕燈前一粲然 涕を灯前に破りて一たび粲然たり

この一首の詩の中に、「飢」「寒」「老」「貧」のすべてが出現しているが、実は創作の年に陸游はわずか四十三歳であり、この詩の前後には「統稻を分ちて晩に帰る」(『詩稿』卷一)⁽⁵¹⁾「小

酌」(同上)⁽⁵²⁾などの詩があり、境遇はまだそれほど悪かつたわけ

ではなく、このような書き方は、ただ単に一種の士大夫の習癖であるに過ぎない。陸游の中年期には、このような詩は比較的に少ない。あるいは、生活面での接触範囲が比較的広がったために、老衰や不遇を嘆き悲しむという考えを、意識の中から排除してしまったのかも知れない。しかし陸游の感慨の詩は、やはり一概に論じることができない。たとえば、「即事」一首(『詩稿』卷三)⁽⁴⁴⁾である。

渭水岐山不出兵 渭水岐山兵を出さず

却攜琴劍錦官城 却つて琴劍を錦官城に携ふ

醉來身外窮通小 醉る来りて身外の窮通 小さく

老去人間毀譽輕 老い去りて人間の毀譽 輕し

捫蝨雄豪空自許 虱を捫る雄豪 空しく自ら許せしも

屠龍工巧竟何成 竜を屠る工巧 竟に何をか成さん

雅聞嶮下多區芋 雅に聞く嶮下 区芋 多しと

聊試寒爐玉糝羹 聊か寒炉に玉糝の羹を試みん

この詩が書かれた年に陸游は四十八歳で、実はまだ年老いてはおらず、結尾の二句は、感傷の調子もいささか濃厚に過ぎる。しかし、この詩は「霜風」詩とは完全に異なっている。なぜならこの年(乾道八年、一一七二)、陸游は南鄭の frontline で四川宣撫使司幹辦公事の職務を担当しており、彼は正に宣撫使王炎の指揮

下にあり、敵に対する戦闘を準備し、成功を渴望している最中に、前線から撤退して、成都府安撫使司参議官となるようにとの命令を受けた。彼は出兵の望みがないことを知り、自分の幻想が打ち砕かれてしまった。だからこそ、次のように詠っているのである。——自分は平素「身外の窮通」「人間の毀誉」を一文の値打ちもないと見て、「虱をひねって兵を談ずる」王猛⁽⁵³⁾に自分を比べていた。しかし、竜を屠殺する技術を習得したものの、ついに屠るべき竜はおらず、すべてが水泡に帰した——と。この詩の憤懣の語気と消極的な要素は深刻なものだが、「渭水岐山不出兵」は、詩全体を完全に奮い立たせている。憤懣と消極は、正に統治階級が抗戦しないことによるものである。ただ抗戦の命令が一たび下され、渭水と岐山に出兵しさえすれば、その時憤懣は興奮と化し、消極は積極へと転じることができると。それゆえこの詩は、一般の感慨の詩とはいささか異なっているのである。

律詩の様式は、通常は一聯が「写景」で一聯が「写情」であり、更に一步を進めると、「景」の中に「情」があり、「情」の中に「景」があるという、「情景交融」の句法となる。たとえば、次のようなものである。

客途南北雁 客途 南北の雁
世事雨晴鳩 世事 雨晴の鳩

『詩稿』卷五十四「書悔」⁽⁵⁴⁾

雁が南北に飛ぶことから旅空のもの悲しきを感じ、鳩の鳴き声につれて雨が降ったりやんだりすることから世事の移ろいやすさを感じる。これが、「情景交融」である。こうした句法は七言律詩の中により多く、またより顕著である。たとえば、次のようなものである。

十年塵土青衫色 十年 塵土 青衫の色

萬里江山畫角聲 萬里 江山 画角の聲

『詩稿』卷二「晚晴に角を聞きて感有り」⁽⁵⁵⁾

十月風霜欺客枕 十月 風霜 客枕を欺き

五更鼓角滿江天 五更 鼓角 江天に満つ

『詩稿』卷十五「幽居感懷」⁽⁵⁶⁾

巴山頻入初寒夢 巴山 頻りに入る 初寒の夢

江月偏供獨夜愁 江月 偏ひととに供す 独夜の愁

『詩稿』卷三十八「龜堂独酌」⁽⁵⁷⁾

萬里關河孤枕夢 萬里の関河 孤枕の夢

五更風雨四山秋 五更の風雨 四山の秋

『詩稿』卷四十四「枕上の作」⁽⁵⁸⁾

關山滿眼愁千斛 関山 眼に満ち愁千斛

歲月催人雪一簪 歲月 人を催し雪一簪

『詩稿』卷五十「新晴」⁽⁵⁹⁾

碧雲又見日將暮 碧雲 又た見る日將に暮れんとする

を

芳草不知人念歸 芳草 知らず人 歸るを念ふを

『詩稿』卷五十二「故山を懷ふ」⁽⁶⁰⁾

陸游の対句のあるものは、非常に「自然圓転」に書かれており、これは正に謝朓（四六四〜四九九）が

好詩圓美流轉如彈丸

好き詩は円美にして、流転すること彈丸のごとし⁽⁶¹⁾

と言う通りである。当然、ここにも一定の境界があり、「圓美」から「圓熟」になると、すでに佳句と悪句の境界に至り、更に一歩進んで「圓滑」となると、詩中の病弊となる。陸游も、

區區圓美非絶倫 区区たる円美 絶倫に非ず

彈丸之評方誤人 彈丸の評 方に人を誤る

『詩稿』卷十六「鄭虞任檢法の贈らるるに答ふ」⁽⁶²⁾

と詠っており、「人を誤る」ことは、正に詩中の病弊である。陸游の「圓美」な詩句には、たとえば次のようなものがある。

正欲清言聞客至 正に清言せんと欲するに 客の至るを

聞き

偶思小飲報花開 偶々小飲を思ふに 花の開くを報ず

『詩稿』卷十五「幽居書事」⁽⁶³⁾

小樓一夜聽春雨 小樓に 一夜春雨を聴き

深巷明朝賣杏花 深巷に 明朝杏花を売る

『詩稿』卷十七「臨安に春雨初めて霽る」⁽⁶⁴⁾

花如解笑還多事 花如し笑ふを解せば 還た事多からん

石不能言最可人 石言ふ能はずして 最も人に可なり

『詩稿』卷三十五「閑居自述」⁽⁶⁵⁾

雨聲已斷時間滴 雨声 已に断たれて 時に滴を聞き

雲氣將歸別起峯 雲氣 將に帰らんとして 別に峰を起す

『詩稿』卷三十五「秋雨初めて霽れ筆を試す」⁽⁶⁶⁾

律詩の特徴は対句があることで、対句があれば必然的に、巧妙さと穩当さを追求することになるはずである。当然、意境が質朴で生動でありさえすれば、本来必ずしも対句である必要は

なく、対句が巧みではない箇所、より一層詩情を感じることさえある。「小樓」の一聯は、「春雨」を「杏花」に對置しており、正にこの通りである。方回（二二七〜一三〇七）の『瀛奎律髓』は、賈島（七七九〜八四三）の「病起」詩中の二聯⁽⁶⁷⁾

身事豈能遂 身事豈に能く遂げん

蘭花又已開 蘭花 又た已に開く

病令新作少 病は新作をして少なからしめ

雨阻故人來 雨は故人の來るを阻む

を例にあげて、次のように言っている。

味者必謂、身事不可對蘭花二字。然細味之、乃殊有味。以十字一串貫意、而一情一景、自然明白。下聯更用兩字對病字、甚爲不切、而意極切。真是好詩、變體之妙者也。

味なる者 必ず謂へらく、「身事」は「蘭花」二字に對すべからずと。然れども細かに之を味わはば、乃ち殊に味有り。十字を以て一串に意を貫き、一情一景にして、自然明白なり。下聯は更に「雨」字を用て「病」字に對し、甚だ切ならずと爲すも、意は極めて切なり。真に是れ好詩にして、變体の妙なる者なり。

陸游は宋の嘉定二年（一二〇九）に世を去り、方回は宋の寶慶三年（一二二七）に生まれており、二人の年代はそう遠く離れてはおらず、律詩の芸術上の手法に関して、彼らは共通の認識を有していたはずである。しかし別の面から言えば、対句が巧妙で穩当であることは、やはり律詩の重要条件の一つなのであり、巧妙穩当であることが困難な箇所、巧妙穩当な対句を作る所に、より一層詩人の技巧が看取されるのである。この要求の下、字句の面で、時にはいささか通常とは異なる措置が必要とされ、古代の詩人は、これを「煉句」と称した。陸游の作品はこの点にすぐれてはいないが、それでも少なからぬ例句を挙げることができる。たとえば、次のようなものである。

兒學無歡異 兒の学 歡の異無く

孫啼有啓呱 孫の啼 啓の呱有り

『詩稿』卷七十三「秋冬の交 雜賦」⁽⁶⁹⁾

一生不作牛衣泣 一生 作さず 牛衣の泣

萬事從渠馬耳風 萬事 渠に從ふ 馬耳の風

『詩稿』卷七「范待制の秋興に和す」⁽⁷⁰⁾

玩鷗有約問何闊 鷗を玩ぶに約有り 問 何ぞ闊なる

斂版無聊歸去來 版を斂むるに聊無し 歸りなんいざ

『詩稿』卷十九「張時可直閣 書もて報すらく、已に奉祠雲

台を請ふを得たりと。長句を作りて之を賀す⁽⁷⁾

誰其云者兩黃鵠 誰か其れ云ふ者ぞ 兩黃鵠

何以報之雙玉盤 何を以てか之に報いん 双玉盤

『詩稿』卷二十二「東涇より小嶺を度るに、聞くならく、地の庵を下すべき有りと。喜びて賦する有り」⁽⁷⁾

絶世本來希獨立 絶世 本来 独立を希ふ⁽⁸⁾

刺天不復計羣飛 刺天 復た群飛を計らず

『詩稿』卷二十三「懐ひを遣る」⁽⁷⁾

長安之西過萬里 長安の西 万里を過ぐるは

北斗以南惟一人 北斗以南 惟だ一人なるのみ

『詩稿』卷二十三「昔に感ず」⁽⁷⁾

当然、これらの例句を、更に区別することができる。「兒學」の一聯の「歆異」「啓呱」は、造句の鍛練である。「問何闊」「歸去來」は、成語を成語に對置し、「誰其云者」の一聯は、一句全体を一句全体に對置している。「長安」の一聯はより一層自由自在で、句法は散文の句法でありながら、措辞が流暢で氣迫がみなぎっているために、散文に似ていると感じさせない。こうした手法はすべて、江西詩派から学び取られたものである。江西詩派の字句の鍛練は、律詩の句法の面で豊富多彩な作用を起こ

し、それだけを取り出して見るならば、形式を重視することを免れない。しかし進歩的な意義を備えた詩全体の中では、多様化された句法は、詩の表現力をより一層増加させる。過去の人々が詩を論じると、陸游の若年の詩は江西詩派の影響を受けており、文字の精巧さを特に重視しているということになるのだが、陸游がこの面で受けた訓練の影響は、その実彼の一生を貫徹している。中年以降、前線地帯での実生活に接し、愛国思想による啓発を受けたことは、彼の作品により一層絢爛たる色彩を増加させることになったのである。

〔訳者補注〕

- (1) 「書憤」……淳熙十三年春、山陰にて。錢仲聯『劍南詩稿校注』(以下『校注』と略記) 第三冊、一三四六頁。
- (2) 名は亮、字は孔明。『三國志』卷三十五。
- (3) 「雜感」……開禧二年春、山陰にて。六首連作の其三。『校注』第七冊、三二〇頁。
- (4) 「夜登千峯樹」……淳熙十四年春、嚴州にて。『校注』第三冊、一四三九頁。
- (5) 「雪夜有感」……淳熙十三年十二月、嚴州にて。『校注』第三冊、一四二八頁。
- (6) 「冬夜讀書忽聞雞鳴」……紹熙二年冬、山陰にて。『校注』第四冊、一七三二頁。
- (7) 「枕上作」……開禧元年秋、山陰にて。『校注』第七冊、三六〇二頁。
- (8) 「恩封渭南伯唐詩人趙嘏爲渭南尉當時謂之趙渭南後來將以予爲陸漕

- 南平戯作長句」……嘉定元年春、山陰にて。『校注』第八冊、四一三三頁。
- (9) 「海中醉題時雷雨初霽天水相接也」……紹興二十九年秋、福州にて。『校注』第一冊、三六頁。原文「無盡」を「無限」に作るが、『校注』に従って改めた。
- (10) 「鄰水延福寺早行」……乾道八年春、鄰水にて。『校注』第一冊、二一七頁。
- (11) 「江樓」……淳熙四年七月、成都にて。『校注』第二冊、六五八頁。
- (12) 「初發夷陵」……淳熙五年五月、夷陵にて。『校注』第二冊、七九四頁。
- (13) 「泊公安縣」……淳熙五年五月、公安にて。『校注』第二冊、七九八頁。
- (14) 「將至金陵先寄獻劉留守」……淳熙五年閏六月、建康近くの舟中にて。『校注』第二冊、八一八頁。
- (15) 「小出塞曲」……紹興四年冬、山陰にて。『校注』第四冊、一九四五頁。
- (16) 「初冬感懷」……慶元元年冬、山陰にて。二首連作の其一。『校注』第四冊、二一九〇頁。『校注』詩題を「初冬感懷二首」に作る。
- (17) 「過采石有感」……淳熙五年閏六月、采石にて。『校注』第二冊、八一八頁。
- (18) 「信州東驛晨起」……淳熙六年九月、信州にて。『校注』第二冊、九一八頁。
- (19) 「春晚」……淳熙七年三月、撫州にて。『校注』第二冊、九四八頁。
- (20) 「舍北」……嘉泰元年秋、山陰にて。『校注』第六冊、二八五五頁。
- (21) 「秋日次前輩新年韻」……嘉定元年秋、山陰にて。五首連作の其五。『校注』第八冊、四二二九頁。
- (22) 「久病灼艾後獨臥有感」……乾道七年秋、夔州にて。『校注』第一冊、一九八頁。
- (23) 「送客至江上」……乾道九年秋、嘉州にて。『校注』第一冊、三二八頁。
- (24) 「晝臥」……淳熙四年七、八月の間、成都にて。『校注』第二冊、六六八頁。
- (25) 「晚春感事」……紹興二年春、山陰にて。四首連作の其三。『校注』第四冊、一六六〇頁。
- (26) 「冬夜」……開禧元年冬、山陰にて。『校注』第七冊、三六五八頁。
- (27) 「曉思」……開禧三年秋、山陰にて。『校注』第七冊、三九九二頁。
- (28) 「題陽關圖」……紹興五年夏、山陰にて。『校注』第四冊、二〇二二頁。原文「荒城」を「荒村」に、また「卷三十」を「卷四十」に作るが、『校注』に従って改めた。
- (29) 「春陰」……紹興四年春、山陰にて。『校注』第四冊、一八七五頁。
- (30) 「黃州」……乾道六年八月、黃州にて。『校注』第一冊、一四一頁。
- (31) 「北窗」……淳熙七年九月、撫州にて。『校注』第二冊、一〇〇二頁。
- (32) 「夜泊水村」……淳熙九年八、九月の間、山陰にて。『校注』第三冊、一一三六頁。
- (33) 「讀書罷小酌偶賦」……淳熙十年十月、山陰にて。『校注』第三冊、二一九頁。
- (34) 「老學菴」……嘉泰二年春、山陰にて。『校注』第六冊、三〇〇〇頁。
- (35) 「登慧照寺小閣」……『校注』第一冊、二二四頁。
- (36) 「親舊見過多見賀強健戲作此篇」……開禧二年秋、山陰にて。『校注』第七冊、三七九四頁。
- (37) 「秋晚」……開禧三年秋、山陰にて。『校注』第七冊、四〇〇四頁。
- (38) 「晉書」卷百十四。
- (39) 「舊唐書」卷七十四、「新唐書」卷九十八。
- (40) 「舊唐書」卷六十七、「新唐書」卷九十三。
- (41) 「秋夕」……嘉泰四年秋、山陰にて。『校注』第六冊、三三三七頁。
- (42) 「枕上」……淳熙四年十二月、山陰にて。『校注』第二冊、七四〇頁。
- (43) 「掩門」……嘉泰二年冬、山陰にて。四首連作の其一。『校注』第六冊、三〇八八頁。
- (44) 「即事」……乾道八年十一月、綿州の道中にて。『校注』第一冊、二七五頁。
- (45) 「春殘」……淳熙三年二月、成都にて。『校注』第二冊、五五三頁。
- (46) 「題菴壁」……淳熙四年七月、成都にて。『校注』第二冊、六五五頁。

- (47) 「獵罷夜飲示獨孤生」……淳熙四年九月、漢州の道中にて。三首連作の其二。『校注』第二冊、六九四頁。
- (48) 「覽鏡」……紹熙二年秋、山陰にて。『校注』第四冊、一六八二頁。
- (49) 「感懷」……慶元三年秋、山陰にて。『校注』第五冊、二三三五頁。
- (50) 「霜風」……乾道三年十月、山陰にて。『校注』第一冊、一一三頁。
- (51) 「統分稻晚歸」……乾道三年、山陰にて。『校注』第一冊、一一一頁。朱東潤氏の原文は「分稻晚歸」に作るが、『校注』に従って改める。統は、陸游の長男子虞の幼名（錢仲聯説）。
- (52) 「小酌」……乾道三年十月、山陰にて。『校注』第一冊、一一三頁。
- (53) 『晉書』卷百十四、符堅載記……桓温入關、猛被褐而詣之、一面談當世之事、捫蝨而言、旁若無人。
- (54) 「書悔」……嘉泰三年秋、山陰にて。『校注』第六冊、三一九六頁。
- (55) 「晚晴聞角有感」……乾道七年夏、夔州にて。『校注』第一冊、一九四頁。
- (56) 「幽居感懷」……淳熙十年十月、山陰にて。『校注』第三冊、一一一五頁。
- (57) 「龜堂獨酌」……慶元四年冬、山陰にて。二首連作の其二。『校注』第五冊、二四三九頁。
- (58) 「枕上作」……慶元六年秋、冬の間、山陰にて。二首連作の其二。『校注』第五冊、二七一八頁。
- (59) 「新晴」……嘉泰二年春、山陰にて。『校注』第六冊、二九八八頁。
- (60) 「懷故山」……嘉泰二年秋、臨安にて。『校注』第六冊、三〇七六頁。
- (61) 『南史』卷二十二、王筠傳……（沈約）又於御筵謂王志曰、「賢弟子文章之美、可謂後來獨步。謝朓常見語云、『好詩圓美流轉如彈丸。』近見其數首、方知此言爲實」。朱東潤氏の原文では、「好詩流轉圓美如彈丸」となっているが、『南史』に従って改めた。
- (62) 「答鄭虞任檢法見贈」……淳熙十年閏十一月、山陰にて。『校注』第三冊、一二四五頁。「彈丸之評」、朱東潤氏の原文では「彈丸之説」となっているが、『校注』に従って改めた。また、原文では「彈丸」の一語のみが単独で引用されているが、ここでは二句あわせて引用した。
- (63) 「幽居書事」……淳熙十年八月、山陰にて。二首連作の其一。『校注』第三冊、一一八二頁。
- (64) 「臨安春雨初霽」……淳熙十三年春、臨安にて。『校注』第三冊、三四七頁。
- (65) 「閒居自述」……慶元二年秋、山陰にて。『校注』第五冊、二二七七頁。
- (66) 「秋雨初霽試筆」……慶元二年秋、山陰にて。『校注』第五冊、二二七七頁。
- (67) 「瀛奎律髓」卷二十六（變體類）。『瀛奎律髓彙評』（一九八六年四月、上海古籍出版社）中冊、一一三二頁。
- (68) 陸游が亡くなったのは嘉定二年年末の十二月二十九日であり、西暦に換算すると、一二一〇年一月二十六日になる。しかしここでは、朱氏の原文を尊重した。ちなみに、錢鍾書氏『宋詩選註』（一九五八年九月、人民文学出版社）の陸游小伝は、没年を一二一〇年と記している。
- (69) 「秋冬之交雜賦」……開禧三年秋、冬の間、山陰にて。『校注』第七冊、四〇二頁。
- (70) 「和范待制秋興」……淳熙三年九月、成都にて。三首連作の其一。『校注』第二冊、六一頁。
- (71) 「張時可直閣書報已得請奉祠雲臺作長句賀之」……淳熙十四年秋、嚴州にて。『校注』第三冊、一四六七頁。
- (72) 「自東涇度小嶺聞有地可卜菴喜而有賦」……紹熙二年夏、山陰にて。『校注』第四冊、一六七頁。
- (73) 「遣懷」……紹熙二年秋、山陰にて。『校注』第四冊、一六九八頁。
- (74) 「感昔」……慶元元年秋、山陰にて。二首連作の其二。『校注』第四冊、二二七三頁。